

デカルトにおける神の誠実性について

久保田 進一

はじめに

『省察』において、デカルトは確実なものを見出すために懐疑を行い、疑っている私の存在は確実だという「コギト」を見出した。その後、神の存在証明を行い、物体の存在証明をして、懐疑から脱することになる。そして、二元論という新たな世界観を提示するのである。その際に、重要なのが神の保証になるのであるが、神の保証を裏付けるためには、神は欺かないという「神の誠実性」が関わってくる。

しかし、「神の誠実性」は、懐疑の段階から問題となっており、当初は「欺く神」として導入されている。その「欺く神」から「神は欺かない」ということが帰結し、神の存在が証明され、神が誤謬の原因ではないとされる。最終的には懐疑から解き放たれて、外的世界が復活し、「私」の見ている世界は、そのとおりにあるということが確認されるのである。

ここで問題になるのは、「欺く神」の議論から「神の誠実性」がどのように導き出され、デカルトの議論の中で「神の誠実性」がどのような役割をなしているのかということである。神の存在証明をしても、その神が「欺く神」のままであるなら、外的世界の存在は欺かれたままである。それは、懐疑から抜け出すことができないままということになる。

そこで、本稿ではデカルトにおける「神の誠実性」がどのように導き出され、どのような役割をなしているのかを明らかにしようと思う。そのために、まず、「第一省察」における「欺く神」について触れておく。これは「数学の懐疑」についての場面である。そして、欺く主体が「欺く神」から「悪霊」に代わることについて見ていく。そして、神が誤謬の原因ではないことについて、見ていく。そして、「神の誠実性」がどのような役割をなしているのかを明らかにしていく。最後に、その結果として、懐疑から抜け出し、外的世界の实在性が、「神の誠実性」によって保証されているこ

とを確かめていくつもりである。

1 「第一省察」における「欺く神」

神が誠実であるのかどうかとは、逆に言えば、神が欺くかどうかということである。神が欺くのであれば、神は誠実ではないということである。最初に、神が誠実であるかどうかを考察の対象にしたのは、「第一省察」である。いわゆる、「数学の懐疑」の箇所である。「数学の懐疑」とは、これまで确实とされていた数学について疑う懐疑である。そして、他の学問に比べて、数学は疑いようがないということから始まる。

「それゆえ、これらのことから、われわれはこう結論してもおそらく間違っていないだろう。自然学、天文学、医学、その他の複合されたものの考察に依存する学問は、たしかに疑わしい。だが、算術、幾何学、その他のきわめて単純で一般的なもののだけを扱い、しかもそれが自然においてあるかどうかには少しも関与しない学問は、何か确实で疑いえないものを含んでいる、と。というのも、私が目覚めていようが眠っていようが、二たす三は五であり、四角形については四つ以上の辺をもたず、これほど明白な真理が虚偽の嫌疑をかけられることはありえないと思われるからである」⁽¹⁾

このように、数学については、揺るぎない信頼を置いていたのがよくわかる。もちろん、デカルトだけではなく、数学の确实性を疑う人は、ほとんどいないだろう。しかし、次の箇所から様子が変わってくる。ただ、いきなり数学を疑うのではなく、外界の存在についての疑いから始まるのである。

「しかしながら、私の精神には、ある古い意見が刻みこまれている。すなわち、すべてをなしうる神が在り、この神によって私はいま存在するようなものとして創造された、という意見である。しかし、この神は、いかなる地も、天も、延長するものも、形も、大きさも、場所もまったくないのだが、しかし私には、これらすべて

がいま見えているとおりに存在していると思われる、というふうにしたかも知れないではないか？」⁽²⁾

この箇所は、外界の世界について、神が欺いているのかも知れないという懷疑である。神はすべての被造物の創造者であり、全知全能であり、第一原因であるということから、神はなんでもできるということになる。このことから、私にいま見えている光景は、本当は異なるものかも知れないというものである。

「さらに私は時として、他のひとたちが自分では完全に知っているつもりのことに関して間違っている、と判断することがあるが、それと同じように、私も二と三とを加えるたびに、あるいは四角形の辺を数えるたびに、あるいは他のもっとより容易なことが考えられるならそのたびごとに、この神は私が誤るように仕向けたかも知れないではないか？」⁽³⁾

この箇所がいわゆる「欺く神」と言われる箇所である。神が誤るように仕向けたのではないかと疑うこと自体、本来あってはならないことである。しかし、確実であるとされる数学を疑うためには、神を持ってくる必要があるのである。同様のことは「第三省察」にも見ることができる。

「もしかして何らかの神が、この上なく明らかであると思われるものにおいてさえも欺かれるような本性を私に与えることもできたはずだ、ということが私の心に浮かんだからにはほかならない。しかし、神の全能というこの先入の意見が私に生じるたびに、もし神がその気になれば、私が精神の目でこの上なく明証的に直観していると思うものにおいてさえも、私を誤らせることは神には容易であると認めざるをえない」⁽⁴⁾

また、同様の件は『哲学原理』にも見ることができる。それは、『原理』の「第一部 5節」のやはり、数学について疑う箇所である。

「というのは、その神はもしかすると、われわれには最も明白とみえることがらにおいてさえも、いつも誤るようなものとして、われわれを創造するよう欲したかもしれないからである。なぜなら、こうしたことは、われわれがときとして誤ることを前から気づいているということに劣らず、ありえたと思われたからである」⁽⁵⁾

このように、数学を懐疑するにあたり、全知全能の神を用いるのである。そもそも、デカルトの数学観には、神が数学を創ったという永遠真理創造説がある。この考えは、神が真理を自由に設定できるというものである。そのため、永遠真理は神の意志によって、変えることができ、もしかしたら、われわれが真理と思っているものが、実は真理ではないのかもしれないという懐疑が生じるのである。したがって、二たす三は五ではないのかもしれないとも思えるのである。数学はわれわれには最も明白なものの一つであるが、その根拠は何に基づいているのかを問うているのが数学の懐疑なのである。

2 「欺く神」から「悪霊」へ

さて、「数学の懐疑」の箇所では、神が欺いているのかもしれないという懐疑が行われていた。しかし、「数学の懐疑」の直後には、デカルトは次のように考え直す。

「しかしおそらく神は、このように私を欺くことを欲しなかったであろう。神は最善と言われているからである。だが、神がこのように私を常に誤るものとして創造したことが、神の善性に矛盾するなら、私がときどき誤ることを許しているのも、やはりその善性に適合しないと思われる。しかし、この最後の点は主張できないのである」⁽⁶⁾

「この最後の点は主張できない」というのは、「第四省察」で議論されることである。つまり、「私がときどき誤ること」を神の原因にははいけないということである。この議論については、後で取り上げよう。ところで、これまで欺く主体が神であ

ったのが、神から悪しき霊に変わっていくのである。その理由について、デカルトは次のように述べる。

「しかし、私が現在あるようになったものになったのは、あるいは運命に、あるいは偶然に、あるいは事物の連続した系列に、あるいは他の何らかの仕方による、とかれらが想定するとしても、誤るとか間違うということは何らかの不完全性であると思われるので、私の起源の作者を、より能力の劣ったものとすればするほど、それだけ私が不完全であり、私が常に誤ることが、ますますより確からしくなるだろう」⁽⁷⁾

ここで述べられているように、デカルトは「誤るとか間違うということは何らかの不完全性であると思われる」という理由から、欺く神は明らかに神の本性に反することであり、「欺く神」という言葉の表現が形容矛盾をした概念でもあることに気づくのである。完全性を持つはずの神が、不完全性としての性質を持つことは明らかに誤りであろう。したがって、ここから「欺く神」という「私」を欺く対象は、消失していくのである。したがって、デカルトは次のように述べる。

「それゆえ、真理の源泉である最善の神ではなく、ある悪しき霊で、しかも最高の力と狡知をもった霊が、あらゆる努力を傾注して私を欺こうとしている、と想定してみよう」⁽⁸⁾

「欺く神」に代わる欺く主体の存在は、「ある悪しき霊で、しかも最高の力と狡知をもった霊」となる。この「悪しき霊」すなわち悪霊は、「欺く神」とはその能力においては全く異なるし、別の欺く主体の存在者である⁽⁹⁾。しかし、デカルトは、「私」を欺く上では、十分な能力を備えていると想定しているのである。そして、悪霊の存在は、「第二省察」にまで引き継がれていくのである。「第二省察」においては、次のように語られている。

「しかし、何か最高に有能で狡猾な欺き手がいて、私を常に欺こうと工夫をこらしている。それでも、かれが私を欺くなら、疑いもなく私もまた存在するのである。

できるかぎり私を欺くがよい。しかし、私が何ものであると考えている間は、かれは、私を何ものでもないようにすることは、けっしてできないだろう。それゆえ、すべてのことを十二分に熟慮したあげく、最後にこう結論しなければならない。「私は在る、私は存在する」Ego sum, ego existo という命題は、私がそれを言い表すたびごとに、あるいは精神で把握するたびごとに必然的に真である、と」⁽¹⁰⁾

この箇所はいわゆる「悪霊の懐疑」と言われるところであり、コギトが見出されるところである。ここで、「悪霊の懐疑」が失くなるわけではないが、確実なものの探求ということにおいて、コギトの発見は、「悪霊の懐疑」を無視できるものとなる。もちろん、外的世界が復活するまでは、悪霊の懐疑は続いていると考えられる。しかし、デカルトは悪霊が「私」を欺くという作用を逆手に取って、「私」の存在を確実にさせたのである。すなわち、悪霊が「私」を欺けば欺くほど、「私」の存在は確実になってくるし、さらには悪霊の存在を無視しても、「私」が考えている間は、「私」の存在は確実になるのである。いまや、悪霊は存在していても存在していなくても、「私」の存在が確実であるということには関係ない。

このあと、デカルトは「私」が何であるのか、の探求をしていく。そして、「私とはただ考えるもの (res cogitans) でしかない」⁽¹¹⁾のであり、「言いかえれば精神(mens)、すなわち魂(animus)、すなわち知性(intellectus)、すなわち理性(ratio)である」⁽¹²⁾ということになる。その後、「第三省察」において、二つの神の存在証明（第一証明と第二証明）を行い、神の存在が明らかになる。そもそも、神が存在しない限り、「私」の存在もありえないことになる。なぜなら、「第三省察」の神の存在証明とは、「私」の起源の探求から始まっている結果による存在証明だからである。「私」の存在が確実である以上、「私」の起源の創造者である神も存在しないとイケないことになる。それは原因と結果の関係である因果律から言えることであり、そのことは無視することはできないのである。デカルトは次のように言う。

「すなわち、私がいまそうであるような本性をもつものとして、つまりうちに神の観念をもつものとして存在するためには、実際に神もまた存在しなければならないことを、私が認めることにある」⁽¹³⁾

さて、「第三省察」で神の存在が明らかにされるが、その神はどのような神であるのか。「第一省察」で登場した「欺く神」なのであろうか。本稿で問題にしているのは、「神の誠実性」という問題であり、神が欺くのか欺かないのかは、「誠実性」に大きく関係してくるからである。デカルトは神を存在証明したあとで、次のように述べている。

「私が神と言っているのは、その観念が私のうちにあるのと同じ神、つまり、私は把握することはできないが、ある仕方では思考によって触れることはできるところのすべての完全性をもち、どんな欠陥からもまったく免れている神である。これらのことから、神は欺瞞者ではありえないことは十分明らかである。というのも、すべての奸計と欺瞞とが何らかの欠陥に依存していることは、自然の光によって明白だからである」⁽¹⁴⁾

以上のように、デカルトの考えている神は欺瞞者ではありえないことが言え、そこから「神は欺かない」ということが言えるのである。そもそも、「神が欺く」ということは、神の完全性という本性に反することなのである。ロディス・レヴィスは、「欺瞞を排除するのは、自発的な信仰の対象たる「善き」神というよりも（その善性は無限なるものの完全性の一つであっても）、まったく積極的な存在の充満なのである。この誠実性は道徳的な意味を持つものではない。（中略）誠実性は存在論的要求なのである」⁽¹⁵⁾と述べている。「神が欺かない」と言えるのは、神の性質である完全性から言えることであり、まさに神の存在に関わる問題なのである。

しかし、「神が欺かない」ということが明らかになっても、われわれは誤ることがしばしばある。神は欺かないとしても、人間は誤謬に晒されているのである。では、この「誤る」という事態は、どのように説明ができるのであろうか。次は、この問題について検討してみよう。

3 人間の誤謬について

さて、「神は欺かない」ということが、明らかになったとしても、それでは、何故われわれは誤るのかという問題が残る。デカルトが言うように、「私は（中略）無数の誤謬にさらされていることを経験する」⁽¹⁶⁾からである。そのことは、「私」を創造した神が、「私」を誤るように創造したのではないかとも疑念を抱かせてしまうのである。それでは、何故、われわれは、しばしば誤ってしまうのか。このことについて、デカルトは「第四省察」において、検討している。ただ、その前に、神が欺く存在ではないという議論から始まっているので、そこから見ていこう。

「すなわち第一に、神が私を欺くことはおよそありえないと私は認める。というのは、すべての詐欺や欺瞞のうちには、何らかの不完全性が見出されるからである。そして、欺くことができることは、何らかの明敏さあるいは能力の証拠であると見えるかも知れないが、しかし欺こうと欲することは、疑いもなく悪意あるいは弱さを示すものであり、したがって神には適さない」⁽¹⁷⁾

このことは、もうすでに「第三省察」で言われていたことである。同じことが『哲学原理』にも記されている。

「ここで考察される神の第一の属性は、神が最高に誠実であり、すべての光を贈与する者であることである。したがって、神がわれわれを欺くこと、すなわち神が、われわれが陥らざるをえないのを経験している誤謬の、本来的かつ積極的な意味での原因であることは、まったく矛盾であることになる。なぜなら、われわれ人間において、欺きうることはおそらく一種の知力の証拠であると思われるにしても、しかし、欺こうとする意志は、たしかに悪意あるいは恐れや弱さからでなければ由来しないので、それゆえ神に帰すことはできないからである」⁽¹⁸⁾

以上のように、「神が欺かない」ということの理由が、ここに示されている。「欺く」ということが、神の属性に反するのであり、ロディス・レヴィスの言葉を借りれば、「神の誠実性は存在論的要求」⁽¹⁹⁾なのである。それでは、人間が誤るのは、どういう理由からなのか。デカルトは次のように言う。

「次に私は、私のうちに何らかの判断の能力があることを経験している。(中略) 神は私を欺こうと欲することはないので、この能力は私がそれを正しく用いていても私が誤りうるようなものとして、神から与えられたのではむろんない」⁽²⁰⁾

「私」には判断能力を神から与えられている。けれども、神は「私」を欺こうとしていないのは明らかであるので、「誤る」のは私が判断能力を正しく使っていないことから起こっている。それでは、なぜ「私」は、判断能力を正しく使わないで、誤謬に陥ってしまうのであろうか。デカルトは誤謬の原因として、次のように述べている。

「私はいわば神と無との中間者、つまり最高存在者と非存在との中間者として置かれているということに気づいた。そして、そこで私が最高存在者によって創造されたかぎりは、私を誤らせたり誤謬に導く何も私のうちにはないが、しかし私はまた何らかの仕方ですすなわち非存在者をも分けもっているかぎりは、つまり私自身は最高存在者ではなく、きわめて多くのものが私に欠けているかぎりは、私が誤ってもなんら驚くには当たらないということに気づいたのである」⁽²¹⁾

この箇所では、誤謬に陥るのは、「私」の存在論的身分に由来することを述べている⁽²²⁾。結局、「誤謬というものは、それが誤謬であるかぎりは神に依存する何か実在的なものではなく、むしろ単なる欠陥であること」⁽²³⁾となる。では、何が欠けているということなのだろうか。デカルトは次のように言う。

「私が誤るのは、神から私が得た真を判断する能力が、私においては無限ではないことから生じることを、私は確かに理解するのである」⁽²⁴⁾

つまり、「私」が誤謬に陥るのは、「私」の判断能力が無限ではないということである。「私」の判断能力は無限性を欠いているということである。しかし、そもそも「私」の存在は有限な存在であり、無限な存在である神とは異なるのは明らかなのである。

また、デカルトは、誤謬の原因を別の角度から論じる。もっと自分自身に近づけて、考察している。すなわち、認識論的分析である。

「私の誤謬（それだけが私のうちにおける、ある不完全性を証明している）がどういものであるかを探求してみると、それは同時にはたらく二つの原因によっていること、すなわち私のうちにある認識の能力と、選択の能力あるいは自由意志に、言いかえれば知性と同時に意志によっていることに私は気づくのである」⁽²⁵⁾

さて、誤謬の原因が、知性と意志が同時に働いているということであると、デカルトは気づくのであるが、一方の知性においては「厳格に見られた知性のうちには、本来の意味でのいかなる誤謬も発見されないから」⁽²⁶⁾とする。他方、意志に関して言えば、「とくに注意すべきことと思われるのは、意志はきわめて完全で、きわめて大きいので、これ以上に完全でより大きい他のものが私のうちにありうるとは考えられない」⁽²⁷⁾としているのである。そうなると、知性にはいかなる誤謬も発見されないし、意志はきわめて完全であるということから、どうして誤謬が起りえるのだろうか。いったい、どこに誤謬の原因が見出されるのであろうか。一見、われわれには、誤謬の原因を知性と意志には見出すことができないように思われる。しかし、デカルトは次のように言う。

「それでは私の誤謬はどこから生じるのであろうか？すなわちそれは、意志は知性よりもより広範囲に広がるので、私が意志を知性と同一範囲内に限らないで、私が理解していないものにまで押し及ぼすという、ただこの一つのことからである。そうしたものに対して意志は非決定であるので、容易に真と善から逸れ、かくして私は誤り、罪を犯すのである」⁽²⁸⁾

以上のように、私が誤るのは知性と意志の不一致によるものだとわかる。意志を知性の範囲外にまで押し上げて判断してしまうことにより、誤謬が生じるのである。したがって、誤謬の原因は神にあるわけではないし、神が与えた知性そのものにも意志そのものにもあるわけではない。意志の範囲を広げ過ぎるのが誤謬の原因なのである。ここで「神は欺かない」ということが確認されるのであり、そこから「神の誠実性」が新たに構築される世界を保証することになり、懐疑から抜け出すための重要な役割を果たすことになるのである。

4 神の誠実性の役割

これまで見てきたように、「神は人間を欺く存在ではない」という神の性質が明らかになった。そうなると、これまで疑われてきた外的世界が新たな世界として構築されるようになってくるのである。決定的なのは「第六省察」における「物質的事物の存在証明」⁽²⁹⁾である。このことによって、これまで「私」の内だけで考察されてきた観念論が、「私」の外の世界に物質的事物が存在するという实在論として示されていくのである。では、どのようにして「物質的事物の存在証明」がなされているのであろうか。

「もし物体が存在するとするなら、想像はこのようにして成り立ちうることを私は容易に理解する、と私は言っているのである。なぜなら想像を説明するのに、これと同じくらい都合のよい仕方は他にはありえないからである。ここから私は、蓋然的に物体は存在すると推測する。しかし、それはただ蓋然的にのみである。すべてを綿密に探索しても、私の想像において見出される物体的本性の判明な観念からは、何らかの物体が存在することを必然的に結論するいかなる論証も得ることができない、だけと思われるのである」⁽³⁰⁾

この段階では、まだ物質的事物の存在（物的事物の存在）は証明されていない。ただ、想像によって物的事物の存在は蓋然的に推測することはできるとしている。しかし、この蓋然的な推測から断定的にあるいは必然的に物的事物が存在するというためには、神の誠実性が必要になってくるのである。次の箇所が、まさに物質的事物の存在（物的事物の存在）について証明しているところである。

「しかしいまや、たしかに私のうちにはある受動的な感覚する能力、すなわち感覚的事物の観念を受け取り、認識する能力があるが、しかしそれらの観念を産出ないし、作り出すある能動的な能力が、私のうちであれ他のものうちであれ存在するのでなければ、私は決してそれらを用いることができないであろう。だが、この能動的な能力はたしかに私自身のうちにはありえない。（中略）それゆえ残るところ

は、この能力は私とは異なるある実体のうちにある、ということである。(中略)しかるに神は欺瞞者ではないので、神が自らによって直接にその観念を私に送り込むのでもなく、そこにおいて、その表現的实在性が形相的にではなく優越的にのみ含まれているような、ある被造物を介して送り込むのでもないことはまったく明らかである。なぜなら、神はそうしたことを認識するいかなる能力をもまったく私に与えず、むしろ反対に、それらの観念が物的事物から送られてくると信じる大きな傾向性を与えたので、もし物的事物以外のものから送られているとするなら、どうして神が欺瞞者ではないと理解されうるのか分からないからである。したがって物的事物は存在する」⁽³¹⁾

このことによって、デカルトの「私」の内なる観念論的世界観から「私」の外に世界が存在するという实在論的世界観が確立してくるのである⁽³²⁾。このことによって、なぜ「私」の内なる世界と「私」の外の世界が一致するのか、という疑問も解消される。それは、誠実なる神が保証してくれているからである。さらには、もしかしたら悪霊によって異なる光景を見せられているのかもしれないという懷疑からも抜け出すことができるのである。もちろん、物的事物の存在が証明されたからといって、物的事物のすべてが、そのとおりであるわけではないということについてもデカルトは言及している。

「しかしおそらくは、物的事物のすべてが、私が感覚で捉えたとおりに存在しているのではない。それら感覚による把握は多くの場合、きわめて不明瞭で混乱しているからである。しかし、少なくとも私が明晰判明に理解しているすべてが、すなわち一般的に見れば、純粋数学の対象として把握されるすべてがそこにおいてあるのである」⁽³³⁾

デカルトは、物的事物の存在は感覚で捉えるのではなく、純粋数学の対象として把握されるべきだとしている。それは、物的事物を延長(空間的な広がり)として、把握するということである。物的事物を感覚で捉える限り、正確には捉えられないということである。物的事物の存在は、あくまでも純粋数学の対象なのである。

さて、物的な事物の存在も証明され、新たな世界が構築され、観念論から實在論へ転換していった後で、デカルトはこれまでの懐疑について次のように言う。

「それゆえ、もはや私は日常、感覚によって私に示されたものが偽でありはしないかと恐るべきではなく、ここ数日の誇張的な懐疑は、一笑に付すべきものとして棄却されるべきである」⁽³⁴⁾

これまでの極端な誇張的な懐疑は、こうして解消されてしまうのである。いまや「第一省察」での「夢の懐疑」において、現実と夢には区別する基準がないと言っていたことも、「いまや両者の間に大きな相違を認める」⁽³⁵⁾と言うのである。その相違とは、「つまり夢は、目覚めている人において起こるように、記憶によって生涯の他のすべての行為と結合されているのではけっしてない、という点において相違している」⁽³⁶⁾ということである。そして、デカルトは最後に懐疑からの決別宣言をする。以下である。

「すべての感覚、記憶、知性を総動員した後に、これらのいずれによっても他のものと矛盾するいかなるものも私に知らされないならば、それらの真理性についてわずかでも疑うべきではない。なぜなら、神は欺瞞者ではないということから、そうしたものにおいて、私はまったく誤ることはないことが帰結するからである」⁽³⁷⁾

このように、すべての感覚、記憶、知性を総動員することによって、極端な懐疑には陥ることはなくなる。もし、なんらかの矛盾が生じれば、真理性に疑いが生じるからである。矛盾が生じなければ、疑うべきではないとする。その背後には、神の誠実性があり、神は欺瞞者ではないことがもうすでに知られているからである。

おわりに

以上のように、デカルトの哲学体系において、神の誠実性の役割は大きい。それは、「私」の内なる観念論の世界観から「私」の外に世界が存在するという實在論の確立

には必要なのである⁽³⁸⁾。それは外的世界の实在性を保証するものだからである。さらに、極端な懐疑を解消するためにも神の誠実性は大きく関わっている。「神は欺かない」という神の誠実性がある、われわれは自分たちに感覚を通して与えられた知覚像を受け入れることができるのである。もし、この神の誠実性がなければ、われわれは感覚を通して与えられる知覚像は受け入れられない。なぜなら、その知覚像は悪霊によって欺かれている像なのかもしれないし、われわれの脳の中に生じた幻想かもしれないからである。したがって、神の誠実性は誇張的懐疑から脱する上でも、外的世界の確立においても重要な役割を果たしていることがわかる。それによって、当初のデカルトの「私もし学問においていつか確固として持続するものをうち立てようと思うなら、一生に一度は全てを根底からくつがえし、最初の基礎から新たに始めなければならない」⁽³⁹⁾という野心的な計画を実現することはできなかつたであろう⁽⁴⁰⁾。

註

- (1) デカルトからの引用は *Œuvres de Descartes, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, J.Vrin, 1996*. からとし、これを AT.と略記し、その巻と頁をそれぞれローマ数字、アラビア数字で示す。『哲学原理』のみは、その部と節のみを記した。訳文については、『省察』、『哲学原理』はちくま学芸文庫による。AT.VII.20. デカルト(2006) p.38.
- (2) AT.VII.21. デカルト(2006) pp.38-39.
- (3) AT.VII.21. デカルト(2006) p.39.
- (4) AT.VII.36. デカルト(2006) p.60.
- (5) AT.VIII.I-5. デカルト(2009) p.56.
- (6) AT.VII.21. デカルト(2006) p.39.
- (7) AT.VII.21. デカルト(2006) pp.39-40.
- (8) AT.VII.22. デカルト(2006) p.41.
- (9) 悪霊と欺く神の関係がしばしば問題となる。山田は、デカルト『省察』(2006)

の註解で「欺く神」は論理的な帰結だが、悪霊は意志的な想定と考えられる」
p.168.としている。

- (10) AT.VII.25. デカルト(2006) pp.44-45.
- (11) AT.VII.27. デカルト(2006) p.48.
- (12) *ibid.* 同上
- (13) AT.VII.52. デカルト(2006) p.82.
- (14) *ibid.* 同上
- (15) Rodis-Lewis, G (1971) p.306. ジュヌヴィエーヴ・ロディス-レヴィス (1990) p.327.
- (16) AT.VII.54. デカルト(2006) p.86.
- (17) AT.VII.53. デカルト(2006) p.85.
- (18) AT.VIII.I-29. デカルト(2009) p.151.
- (19) Rodis-Lewis, G (1971) p.306. ジュヌヴィエーヴ・ロディス-レヴィス (1990) p.327.
- (20) AT.VII.53-54. デカルト(2006) p.85.
- (21) AT.VII.54. デカルト(2006) p.86.
- (22) 山田(1994) p.268. ここで山田は、われわれが誤謬に陥るかについて、二つの角度から分析している。一つは存在論的分析であり、もう一つは認識論的分析である。
- (23) AT.VII.54. デカルト(2006) p.86.
- (24) AT.VII.54. デカルト(2006) p.87.
- (25) AT.VII.56. デカルト(2006) pp.88-89.
- (26) AT.VII.56. デカルト(2006) p.89.
- (27) AT.VII.56-57. デカルト(2006) pp.89-90.
- (28) AT.VII.58. デカルト(2006) p.92.
- (29) 「物質的事物の存在証明 (物的事物の存在証明)」については、拙論「デカルトにおける物体の存在について」名古屋大学哲学論集 (14), 14-29, 2019-04 を参照。

https://nagoya.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=28670&item_no=1&page_id=28&block_id=27

- (30) AT.VII.73. デカルト(2006) pp.111-112.
- (31) AT.VII.79-80. デカルト(2006) pp.119-120.
- (32) 小林 (2000) は、第一部 第三章「デカルト形而上学の基本構造—観念論から実在論へ」の「4 外的世界の存在証明と物理的実在論」 pp.145-149 で、観念論から実在論への展開を示している。
- (33) AT.VII.80. デカルト(2006) p.120.
- (34) AT.VII.89. デカルト(2006) p.132.
- (35) AT.VII.89. デカルト(2006) p.133.
- (36) *ibid.* 同上
- (37) AT.VII.90. デカルト(2006) p.133.
- (38) このことに関して、小林 (2000) p.149は、「デカルトの形而上学は、まずはコギトの定立から帰結する観念論的見地をラディカルなまでに押し進めながら、しかし、それを、形而上学的実在と物理的自然の二つの方向において超出し、典型的な実在論の立場を設定するという構造を示しているのである。その意味で、この哲学は、コギト（意識）の自明性から出発しながら、どのようにして外的客観的存在に基づく実在論の知識体系をたてうるかという課題に対する答えを用意しているものであり、近代の観念論を超える見地を示しているものである」としている。
- (39) AT.VII.17. デカルト(2006) p.34.
- (40) このことに関して、山田(1994) p.179は、「デカルトは神が証されてはじめて人間の真理認識の可能性が保証される、と考えている。実際その保証の下に、コギトから外界の認識への通路が開け、自然学がその上に建つべき基礎が固められるのである」としている。

参考文献

Descartes, R. (1904 (1996)) *Œuvres de Descartes*, publiées par Ch.Adam et P.Tannery. Tome VII, VIII-1. Vrin.

ルネ・デカルト (2006) (山田弘明訳) 『省察』 ちくま学芸文庫.

ルネ・デカルト (2009) (山田弘明・吉田健太郎・久保田進一・岩佐宣明訳・注解)
『哲学原理』 ちくま学芸文庫.

Gouhier, H. (1962) *La pensée métaphysique de Descartes*, Vrin.

久保田進一(2019) 「デカルトにおける物体の存在について」 *名古屋大学哲学論集*
(14), 14-29, 2019-04.

小林道夫 (1995) 『デカルト哲学の体系』 勁草書房.

小林道夫 (2000) 『デカルト哲学とその射程』 弘文堂.

Rodis-Lewis, G (1971) *L'Œuvres de Descartes*, Vrin. 2vols. ジュヌヴィエーヴ・ロディス
-レヴィス (1990) (小林道夫・川添信介訳) 『デカルトの著作と体系』 紀伊國屋書
店.

山田弘明 (1994) 『デカルト『省察』の研究』 創文社.